

2-4 関東南部における重力の再測

東京大学地震研究所測地研究室

1969年11月から12月にかけて約30日間国土地理院、京都大学、東京大学地震研究所の三機関のLa Coste 重力計6台により関東南部の一等水準路線に沿い、重力値の測定をおこなった。この測定の約3ヶ月後1970年3月から4月にかけて約20日間東京大学地震研究所の2台のLa Coste 重力計で、同一地点の再測をおこなった。この再測の結果について報告する。

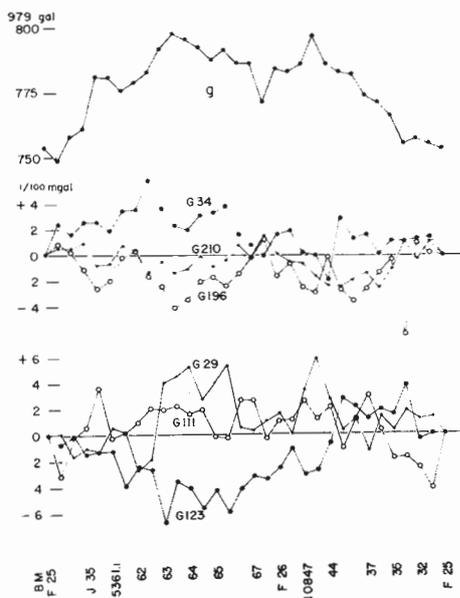
前回1969年の測定結果から、閉塞差を補正した各重力計の6台の平均からの偏差は第1図の通りである。図には三浦半島と房総半島を別けて示している。

1970年の2台の重力計の結果と1969年の6台の平均との差は第2図に示す。実線で結んであるのは2台の平均で、この平均値より大きい値は三浦、房総半島を通じてほとんどG34重力計の結果であり、G210重力計は小さい値を示している。

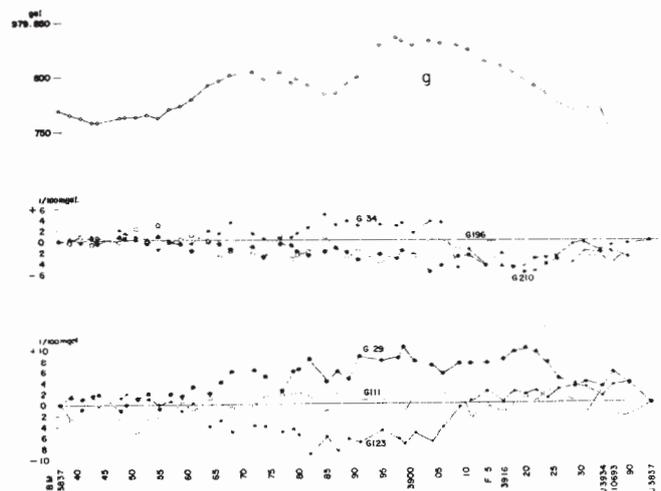
なお、第2図の房総半島における下の図は、1969年の測定で、平均値からの偏差が少ない3台を選び、それらの測定平均値と1970年の2台の平均との比較である。

この第2図において、三浦半島では油壺、城ヶ島と久里浜附近で重力の減少が、また房総半島では江見、大原間で重力値の増大がみられるが、第1図で見られるようにそれぞれの重力計の偏差が割合に大きく、測定または整理の方法等とも併せて再検討を要する問題点を含んでいる。

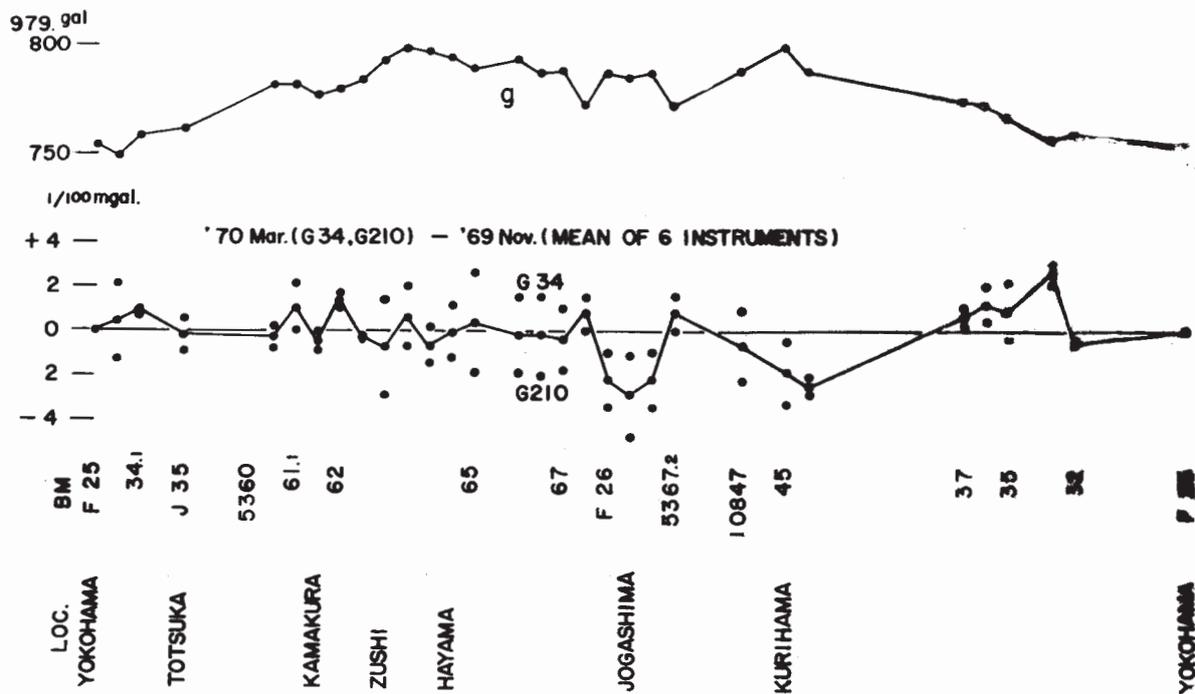
第1図 (イ) 三浦半島



第1図 (ロ) 房総半島



第2図 (イ) 三浦半島



第2図 房総半島

